

史料館だより
第12号
1988.11.5

編集・望月 浩
発行・神戸深江

生活文化史料館

〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-17
電話(078) 45314980

摂津の考古学からみた東灘(四)

芦屋市教育委員会 森 岡 秀 人

東灘区周辺の縄文遺跡で最も数多いのは晩期に属する遺跡である。縄文時代最末期に位置づけられる晩期の時期は、一般的に集落自体の沖積平野進出が図られており、西摂地域も大半の晩期遺跡が標高の低い所から発見されている。東灘区では、本山町・北青木・本庄町などの遺跡があり、いずれも同一地域で弥生時代前期の遺跡も形成されている。隣接する芦屋市域でも寺田遺跡や芦屋廃寺遺跡が山麓線以南に営まれており、前者はやはり弥生前期の遺跡と関連するようである。ごく最近の小調査でついに遠賀川式土器を含む土壌などの遺構が見出された。狩猟採集の縄文時代から水稻農耕の弥生時代へとその推移を巧みに説明するのは社会科の教科書であるが、考古学の研究が進みすぎて、そう簡単にいかなくなった昨今、身のまわりの遺跡でそのあたりの複雑さを探ってみるのもおもしろいと思う。

今号では、考古学界の最新の情勢なども混えつつ、稲作農耕の始まりについて若干の愚考をめぐらそうと思う。

突帯文土器Ⅱ 弥生土器か

縄文晩期後半の土器は、通常、突帯文土器と呼ばれている粗製の深鉢形土器が主体をなす。刻み目を施した隆帯を口縁部や胴部に一〜二条とりつけただけの文様がきわめて簡素な土器であり、一般の人からはとうてい縄文土器とは思われ難い代物であるが、さかのぼって出自のたどれる歴然とした縄文時代の日常容器である。

なによえこのように強調したかというところ、近年、船橋式や長原式といった型式呼称が与えられているいわゆる突帯文土器を農耕社会に入って以降の所産というだけで、弥生土器にみだててしまう考古学者が著しく多くなってきたからである。

確かに北部九州地方や山陽地方では、突帯文土器文化期の初期水田が明確な畦畔を伴って検出されており、この段階の人々が水稻農耕を営んでいた事実が立証されつつある。福岡県板付遺跡や佐賀県菜畑遺跡、岡山県津島江道遺跡がその代表例であり、水田こそまだ未発見であるが、ごく最近、香川県高松

図1 牟礼遺跡出土縄文晩期井堰の現地説明風景
(1985年 筆者撮影)



市林坊城遺跡では木製農具が縄文晩期の土器を伴ったという伝聞に接しており、四国地方においても縄文時代の農耕遺跡が存在することは疑いえないものとなっている。

我が近畿地方にあっても、まだ記憶の生々しい一九八五年、大阪府茨木市牟礼遺跡から船橋式よりも一段階古い滋賀里IV式期の井堰・取水路・水田面が見出されており、堰構造に若干疑義を残すものの、縄文時代晩期後半には農業を営み始めた人々がいたらしい情勢が看取される(図1)。兵庫県伊丹市口酒井遺跡では、船橋式から長原式に位置づけ可能な磨製石包丁二点が存在し、一つは緑色片岩製の直線刃半月形、いま一つは粘板岩製の外弯刃船形と報じられている(図2)。さらに、大阪府山賀遺跡(その一)調査区のD5トレンチの縄文晩期相当層からは栽培イネがプラントオパールによる土壌分析(細胞化石の認定)などにより明らかにされている。

したがって、九州山の寺式に併行する時期から、

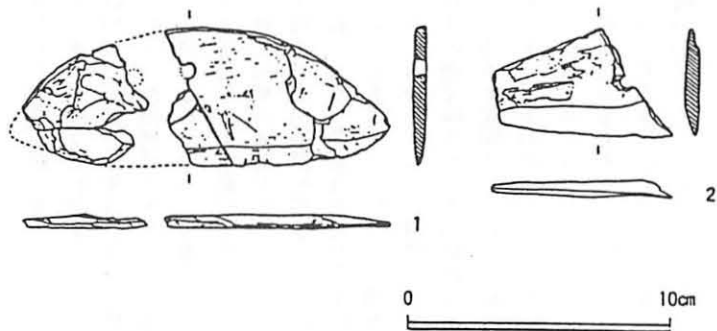


図2 口酒井遺跡第8次調査出土磨製石包丁<浅岡 1988から>

西日本全体が農耕社会に突入している蓋然性が高まっている昨今であるが、私は依然として、突帯文土器は縄文人・縄文社会の作り使った器であるから、その時代は稲作を既に始めていようと縄文時代と呼ぶのがふさわしいと考えている。生産経済移行の段階から弥生先I期（『弥生早期』）と呼んで弥生時代と規定づける佐原真氏の定義に百歩譲ったがうとしても、突帯文土器を弥生土器と名称換えしてしまうような議論だけは断固許せないと思っっている。弥生時代に縄文土器が残ると考えても、けっして悪

くはないであろう。
読者の諸賢はいかがかな。

本庄町遺跡の弥生前期水田址をめぐって

さて、東灘区において一九八四年、京都の平安博物館が発掘を行った本庄町遺跡では、この近辺で最古の生産遺構である弥生時代前期の水田址がみつかっている。六甲山地前面の標高四メートルを測る沖積低地で、国道二号線より南に調査地点は位置している。海浜からは約一歳の臨海部であり、芦屋川や住吉川など大阪湾へと注ぐ河川の本流からは少し距離をおいている。こんな市街地の深部に兵庫県では最も古く考えていい水田遺構が眠っていたのだから、その報に接した時はただならぬ驚きを禁じ得なかった。確認された水田は、VIa層の上面に広がり、長方形の限られた発掘区の中に一四枚の田面を数えることができる(図3)。刊行された報告書によると、田積には四平方メートルから四二平方メートルまでのバリエーションがみられるが、二〇平方メートル代の大きさのものが目立つようである。田面を走る畦畔は幅二〇〜四〇センチ、高さ一〇センチ前後を測り、断面形は台形ないしカマボコ形となっている。

水田全体の区画は傾斜する自然地形に即した小さな区割で、考古学では通常「小区画水田」と呼んでいる部類のものである。区画を成す畦畔の連絡はそれぞれ直交せず、互い違いとなっており、三又状に交わる部分もみられる。

水口は水田11と水田12の間に一か所だけ認められるが、各田面への用水の供給は、畦畔をオーバーブローさせるいわゆる畦越し灌漑の方法が採られたよ

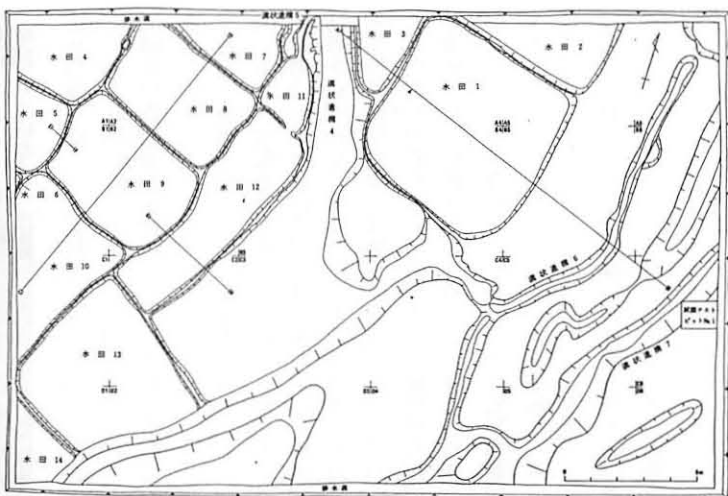


図3 本庄町遺跡の弥生前期水田址<古代学協会 1985から>

うであり、それは多分に水田の立地した地形に影響を受けたものである。

というのも、本庄町遺跡は東方の東川扇状地、西方の高橋川扇状地の中間にあつて、緩やかな扇状地地形の上ののつており、前面には東西南方向に細長くのびる深江砂洲が存在し、それとの間にはなだらかな傾斜の後背湿地が広がる環境の下にあるからである。排水が容易でない泥沼地が生産域として選択されていない点は、後にふれるが重要な立地条件といえるだろう。

水田の耕土は、一〇〜一五センチの厚さの灰黒色土から成り、耕土面には足跡が明瞭に検出されている。遺跡における古代人の足跡は、近畿地方では水田調査が活発化し始めた一九七〇年代後半頃より各地で確認例が増してきたが、精密に調査された最初の例は、大阪府の瓜生堂遺跡あたりであろうか。もちろん、それ以前にも古墳の主体部の粘土面に残るヒトの足跡などに気づかれた考古学者もあるが、足跡の形状や法量に大きな関心が呼び起こされたのは、やはり水田遺構の発掘を契機にしたとみてよい。実際、粘土やシルト質土層から形成される水田面につけられた足跡は、洪水砂や火山灰などにより一気に埋没

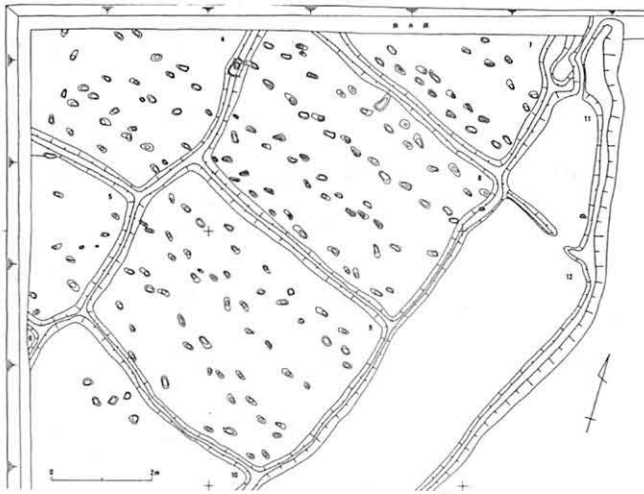


図4 本庄町遺跡水田面にみられるヒトの足跡
〈古代学協会 1985から〉

すると、非常に検証しやすい状態になるのである。私の勤務する芦屋市で初めて埋没水田が検出された時も、最初は砂層で覆われた粘土面に残る無数の微妙な起伏と結果的にはカラスキの耕作跡と解された浅い条痕に注意を十分払ったからこそ気がついたという状況であった。発掘を二〜三年やり始めた程度の者でも、粘土の凹みに陥入した砂の存在はきわめて判りやすく、スプーンやヘラでコツコツ掘る忍耐と時間さえ許されれば、一応は掘りこなせる遺構であるが、糸口を見出すにはそれなりの経験と観察眼がやはり必要であり、私も芦屋の調査チームは昨年実施された久保遺跡の中世水田址の発掘でようやく体得できた技術といえる。

少し横道にそれてしまつたが、本庄町遺跡の足跡は歩行状況までよく読み取れる点が貴重である。水田4・5・7・8・9にあつては、畦を越えて連続歩行する様子が把握されており、畦畔が農業労働の完結単位になり得ていないことが知られる(図4)。ただし、足跡から作業の具体的内容までは立証できず、単純歩行を示すことだけなのかもしれない。

水田は北東から南西方向に向かつて低くなる傾斜地に地形をよく克服して開かれたものであり、排水的機能を果たしていたと推測される溝4、それから水田11へ引水する溝5、北から南西方向に流れ、溝4と南に分流する溝6、北東から南西へ流れる溝7などがそれぞれ給排水を考える上で重要な役割を担っている。また、溝6・7の存在する発掘区の南東部には堤状の高まりも存在している。

この水田の時期はどのようにして考えられたのであろうか。それはやはり土器が鍵を握っていた。出

土遺物の時期は、層序をよく反映しており、上からII b層は一四世紀代、III a層は一三世紀代、IV a・IV b層は六世紀後半〜七世紀前半と順次古くなっている。問題の水田面の広がるVI a層からは、発掘区南東隅の限定された区域ながら弥生前期の土器片一〇数点と縄文土器片一点が検出されている(図5)。他に不純な遺物がみられないため、消極的ではあるものの弥生時代前期後半と推定されたようである。

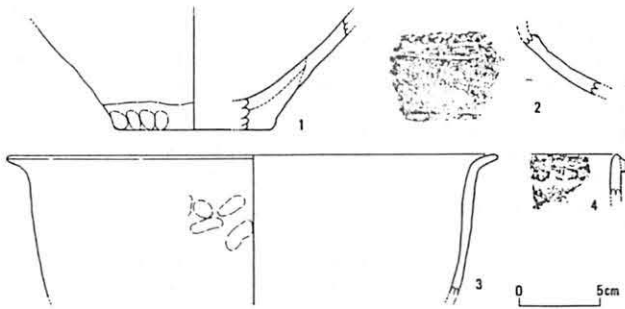


図5 本庄町遺跡のVIa水田層出土の土器(一部)
〈古代学協会 1985から〉

大阪湾沿岸に集中する初期水田址

近畿圏で弥生時代前期にまで遡る初源段階の水田址は、けつして多くはない。しかも、その分布は現状のところ、河内潟の南岸に広がる低平地に集中しており、そのすべてが長瀬川と玉串川間の最も低所に偏って存在する。潟岸に近い北側から順次あげると、大阪府東大阪市の若江北遺跡、山賀遺跡、友井東遺跡、八尾市の美園遺跡の四例で、いずれも近畿

自動車道天理と吹田線の建設事業に伴って発掘された河内平野屈指の大遺跡である(図6)。

これらの遺跡で見出された弥生前期水田址に共通してみられる特徴は、北部九州の板付遺跡のようなタイプのものが全く認められないことである。つまり、幹線人工水路による大規模な灌漑を積極的に実施し、杭や矢板で補強策を施した常設畦畔を用いて五〇〇平方メートルを越えるような大型水田を営む農業形

態は考え難く、その経営のあり方に差違が感じとれるのである。

水田区画の比較的把握しやすい山賀遺跡では、田面が二三枚以上想定され、一枚の田積は五〇〜一四〇平方メートル程度を測る。水口や排水口は畦につくられておらず、自然地形を利用した給排水の状況が推測でき、本庄町遺跡とよく似たあり方を示している。友井東遺跡では南北約一〇〇メートルの範囲で四か所とも不定形な平面プランを示し、畦畔は一方が開放されたものが多く、区画として閉塞していない。水田一枚としての想定面積は一三〜一八平方メートルで、大きいものではなく、田面には高低差が著しくみられる。南は自然河川により画されている。

小河川により田面が限られる様相は美園遺跡や山賀遺跡でも認められ、自然の小流路とは切り離せない立地条件がうかがい知れよう。本庄町遺跡で検出されている溝遺構の中にはこういった自然の流路も含まれていた可能性があるだろう。その一方、比較的大きな川の近くは避けられる傾向が全体にみられる。

ところで、兵庫県下では昨年の秋、紛れもなく弥生前期に比定できる良好な水田址が同じ神戸市の須磨区で発見されている。戎町遺跡と呼ばれる弥生遺跡であるが、ここでは現地表下二メートルの所に水田面が存在し、三〜八平方メートル程度の驚くほど極小区画の水田がかなりの規則性を有して連なっていた。畦畔については、南北方向に明確である一方、東西の方向には不明瞭といった特徴も認められている。それはひそかに導水のシステムを暗示する。

この遺跡で重要な点は、弥生前期後半の遺構によ

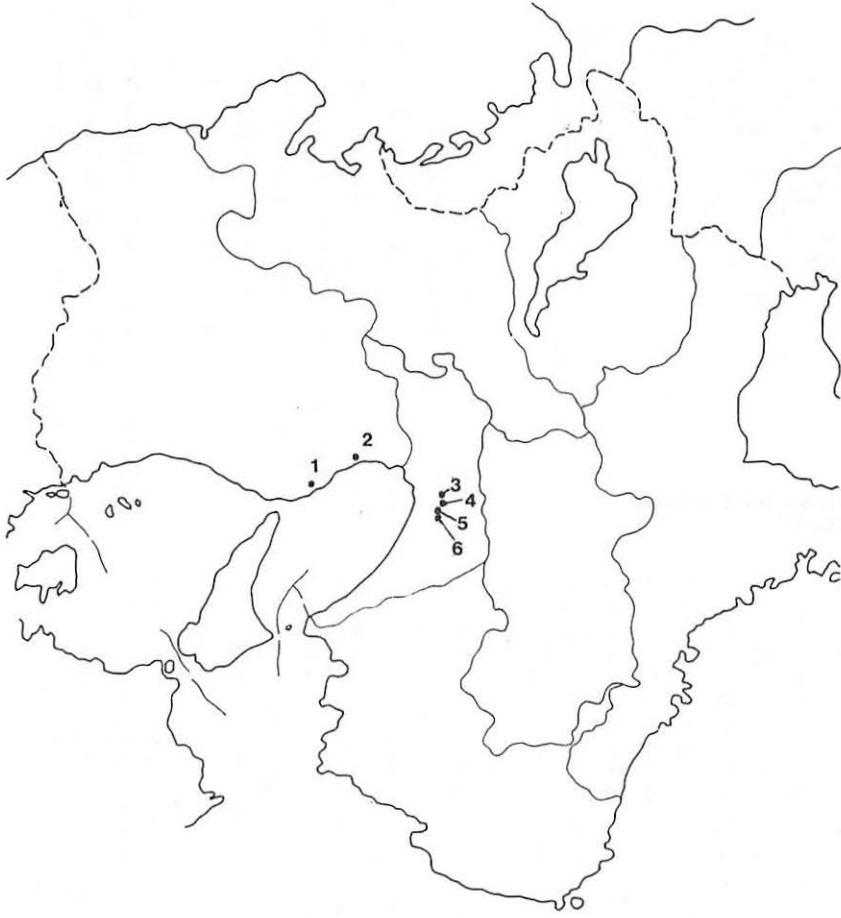


図6 近畿地方の初期水田遺跡の分布
 1. 戎町(兵庫) 2. 本庄町(兵庫) 3. 若江北(大阪)
 4. 山賀(大阪) 5. 友井東(大阪) 6. 美園(大阪)

つて水田自体が明らかに切削されていることで、弥生前期前半にだって遡る余地があるからである。類似した小規模規格志向型の水田は、岡山県津島江道遺跡(突帯文土器期)や高知県田村遺跡(弥生前期)でも確認されており、かような小区画水田が導入期の水稲耕作からとり入れられていたことは、もはや事実として認めねばならないようである。

本庄町遺跡も他の初期水田址との属性比較から弥生前期の蓋然性はすこぶる高く、私は報告者の位置づけ通りこの時期のものとして不自然な点はないと考えている。したがって、同じ東灘区のより海浜部に位置する弥生前期前半から先行して営まれた北青木遺跡は注目すべき存在といえ、「深江」という地名の由来を正しく伝える旧海岸線の入江は、西から瀬戸内沿いに伝播してきた初期農耕文化の大阪湾岸における一つの定着地として重要な土地であったと想像される。

本庄町遺跡の初期水田址はそれを端的に物語るものとしてもっと評価されてよいし、私たちは湿潤地で経営が開始されたとされる排水主体型の導入期水田の粗放なイメージからもうそろそろ抜け出さなければならぬ。

晩期縄文人は果たして稲作をしたのか

今号のしめくくりとして、最後に近畿地方の晩期縄文人が水稲農耕を始めていたか否かを、水田遺跡の様相をもとに若干考えてみたい。

先に記した大阪府下の弥生前期水田址のみられた四遺跡には、土器様相においていま一つ重大な共通項が存在している。それは言うまでもなく、縄文晩

期終末の長原式土器を伴出しない点である。長瀬川以南に分布する久宝寺・佐堂・城山・長原などの諸遺跡や玉串川以東の生駒西麓に立地する鬼虎川・鬼塚両遺跡が長原式を中心とする突帯文土器主体の集落であることを思えば、それらにはさきこまれた低湿部の弥生前期水田地帯がすこぶる先進性を帯びてみえてくる。前期の四遺跡はそのすべてが第Ⅰ様式後半から営まれ始めたものであり、現状では弥生前期後半に始期をもつ相当結束力の強い本格的な農耕集団において、初めてまとまりある生産域の展開が促されたものと解される。

わが本庄町遺跡についても同様な解釈を与えたいとひそかに考えているが、その担い手が周辺縄文人たちの急激な同化・変革によるものなのか、瀬戸内ルートによって猛スピードで東進してきた外来者集団によるものなのか、今の私にはわかに決し難い。いずれにせよ、少なくとも近畿地方にあつては、大地と不可分な水田址自体が縄文時代の遺跡から見出されていない以上、靱痕土器や石包丁の存在を直ちに食糧生産の開始と結びつける昨今の学界の動静には賛同できないのである。(つづく)



縄文土器

【スタッフから一言】

★神戸市立中央図書館・2F郷土資料室の机の数が少ない。もっと増やして下さらないと、郷土資料が閲覧出来ません。御一考のほどを。(Y・M)

★今度、新しく入った事務局員の中島薫です。元気いっぱい頑張りますのでよろしくお願ひします。(K・N)

★暑い時は何もする気が起こらずひたすら寝ておりました。暑さが通り過ぎ、「さあっ」と思いきや気候がよくなるとまたまた睡魔が……。人間に睡眠という欲望がなければ私は今頃大学者になっていたのでは。(H・M)

★学生の頃と違って、毎日いそがしい日を過ごしていますが、どうも生活サイクルが乱れて困っています。元の生活にもどりたい。(Ton・N)

★2Fで新しく深江北町遺跡を中心とした考古の企画展を実施中です。ぜひ一度ごらん下さい。(M・K)

★今回、一階展示室に戦争資料コーナーを開設しました。戦後43年、戦争を知らない子供達だけでなくその子供達も大人の仲間入りをする今。忘れ去られようとしている戦争の悲惨さを展示されている資料を通して今一度考え直してみませんか。(T・M)

神戸薬科大学構内古墳(二)

史料館研究員 藤川 祐 作

本誌一〇号で筆者は「神戸女子薬科大学構内古墳」(以下「前報告」と略)として、その地形実測図の紹介と出土遺物の一部について報告を行なったが、その中で、鉄器の実測図が提供されたことと、須恵器の実測図が一部不足していることから、補足報告を約束していたので報告する。

まず、神戸大学考古学研究会へ、石室の実測の提供をお願いしていたが、よい返事をいただけなかった。この件については、前報告でもしるしたように、あらためて一日も早い報告書発刊を切望したい。さて、須恵器の実測図(原図)も含め、一括して資料が芦屋市教育委員会に保管されている可能性が強いので、担当者の岩本昌三、森岡秀人両氏に確認をお願いしていたところ、過日その一括保管が確認され、又、当時岩本氏の手によって撮影された遺物写真も合せて提供を受けることができた。以下、これらの資料を材料として、主として遺物について報告していきたいと思う。

まず、前報告の若干の訂正から。収載した13点の出土遺物の内、1〜10の実測者は尼崎恵美子女士、12は鈴木富登氏、鉛筆トレースは尼崎貞子女士の手によるものであった。そのトレースの複写計3枚のうち筆者の手にあった2枚を再トレースしたもの報告した。残る11・13は、一九八三年神戸大学考

古学研究会発刊の六甲祭パンフレット所収の「神戸女子薬科大学構内古墳測量調査概要」から、やはり再トレースしたものである。

今回提供された資料から、あらためて尼崎女士と村川行弘氏の手にかかる、出土遺物の観察表と照合したところ、前報告分13の他に須恵器では坏身片2点・高坏坏部片1点・平瓶1点・甕片3点の断面図と拓本が確認された。以上の7点の須恵器は、原図からトレースした。

次に、鉄器の実測図は神戸大学考古学研究会が本墳の測量調査を実施したおり、森岡・松田和義両氏に依頼して実測されたもので、松田氏よりトレースの複写が提供されたものを再トレースした。

なお、芦屋市教育委員会保管資料の中にも、前報告の坏類および高坏脚部・青銅鏡・鉄器各1点ずつの実測原図がある。又、実測図などはないが、観察表には須恵器の坏身片1点・提瓶(?)片1点・土師器片の器種不明の1点が報告されている。

今回あらたに実測図の提供された遺物を、観察表を元に紹介する。

須恵器(第1図、14〜20)

14・15は坏身で、14は丸味のある口縁部。15は薄手の口縁部。

16は高坏坏部で、薄手の口縁部。一条の沈線あり。

17は平瓶で、高さ八・三センチ、胴径一〇・一センチ、口縁径五・〇センチを計り、口頸部と胴部の継目には手ひねりの痕跡を残す。焼成良。

18〜20は甕胴部片で、18は外面に叩目、内面青海波、焼成良。19は内面青海波。20は内面青海波、外面共に磨耗激しい。

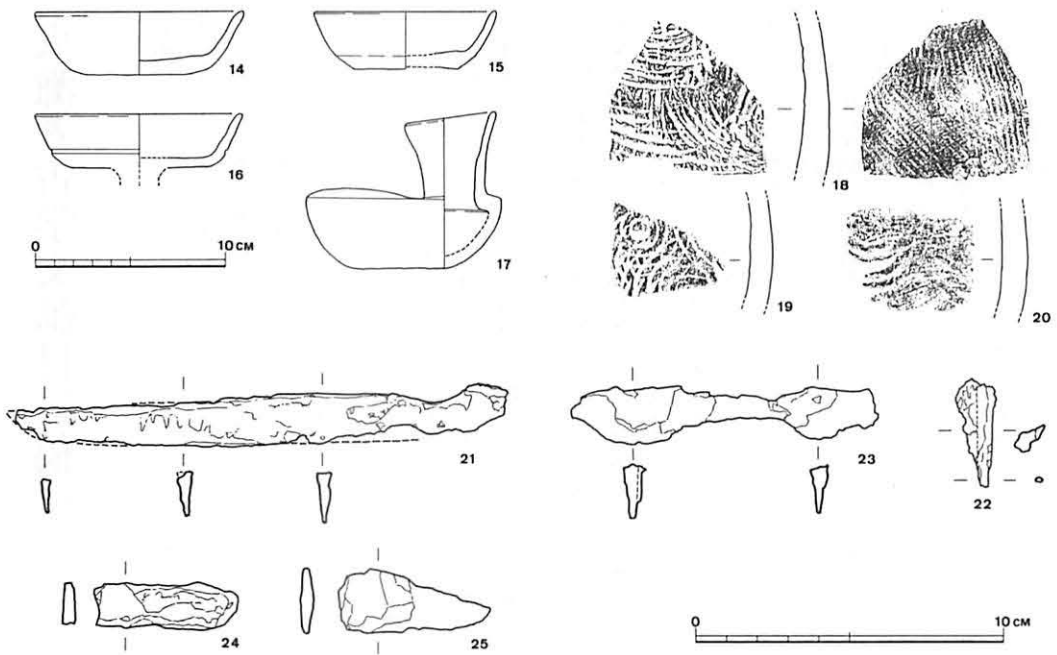
鉄器(第1図、21〜25・第2図)

21は刀子。25はヤリガンナ(?)。他不明。

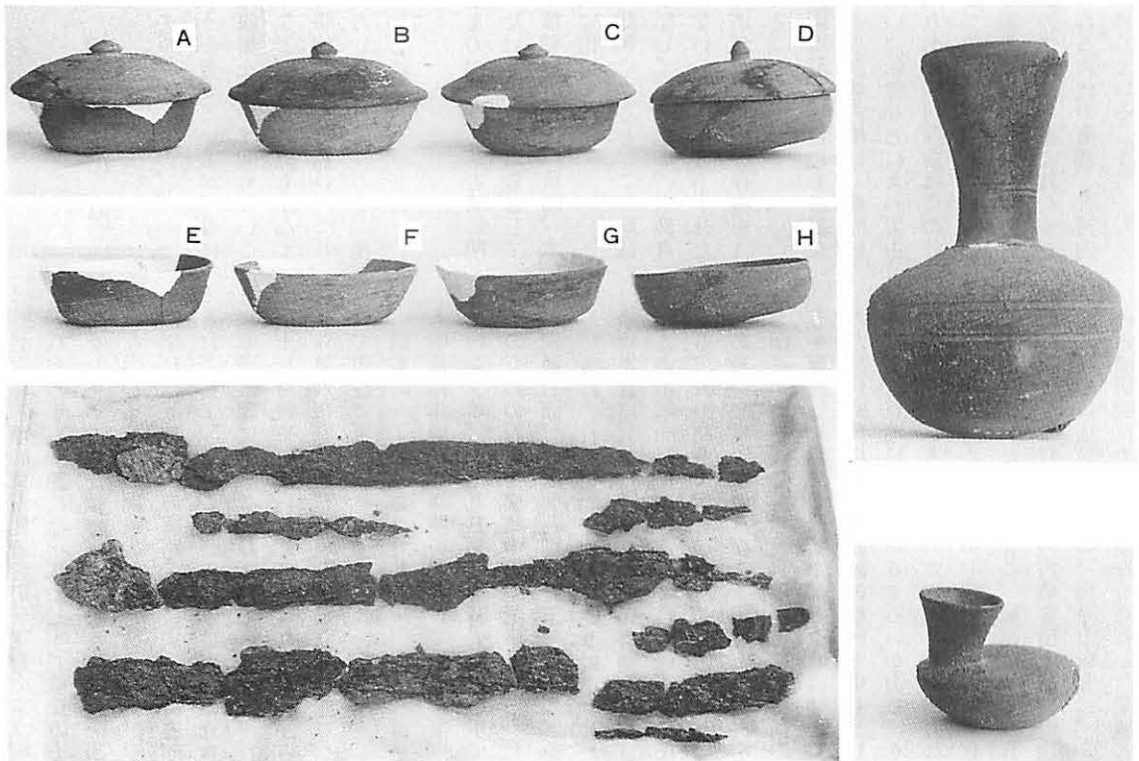
須恵器のうち長頸壺と平瓶については問題はないが、前報告分とあわせて12点の坏類は、その形態から1・3・4・5の坏蓋が第2図のD・B・C・Aに、7・8・9・10の坏身がH・E・G・Fに、それぞれ対応すると思われる。鉄器については、実測図の存在するものよりはるかに多くのものが写真に写っており、錆化の問題もあるので照合は差し控えた。

最後にいつもながら本小稿を書くにあたっては、次の諸氏の協力があった。記して深謝にかえる。芦屋市教育委員会・岩本昌三・森岡秀人・松田和義各氏、古川久雄学友には全般にわたってご協力があった。

なお、前報告でものべたように、将来、遺物が一括して史料館に寄託されることがあれば、あらためて須恵器の生産地などについて論究してみたい。



第1図 出土遺物実測図 (14~20須恵器 $\frac{1}{4}$ 21~25鉄器)



第2図 出土遺物写真 (須恵器・鉄器)

東灘考古学文献目録稿(一)

史料館調査員

柏原 正民

はじめに

日本中至るところで開発が行なわれている今日、それに伴う発掘調査の数も爆発的な勢いで増え続けている。例えば神戸市の場合を見ても、少し古い例ではあるが一九八三年の一年間に行なわれた発掘調査は三五件で、この他の小規模な試掘調査や立ち会い調査も含めるとさらに膨大な数にのぼるものと考えられる。このような状況は東灘区でも例外ではなく、区内のあちこちで調査が行なわれ、多くの新たな事実が判明するなど貴重な成果をおさめている。

神戸地域の考古学関係の文献を集めたものに、兼康保明・真野修両氏の労作「神戸・明石関係考古学文献目録」(歴史と神戸)No.六六、一九七四年)がある。それから経過すること十四年。調査の数に正比例してその成果を著した論文や報告書類も、ともすれば専門に研究に携わっている人でも完全に把握するのが難しいのでは、と思えるほど増えている。

現在神戸深江生活文化史料館において筆者は、神戸市の東灘区周辺で行なわれた発掘調査のデータ収集を思いたち、その作業を開始している。これによって集まりつつある東灘区に関する考古学の成果や業績を整理し、また紹介してゆく意味合いを兼ねて東灘区考古学文献目録稿を発表していきたいと思う。単に目録を掲げるのではなく、東灘区内の考古学発

見、研究史風に書き進めようと考えているが、なにごとから貴重な文献の見落としなど、至らぬ点も少なくないかと思う。そのような事項は追って補い、より完璧な物に近づけるよう努力したいと思うので、多くの方々の御教示をお願いしたい。

一、明治から大正

さて今回は明治から大正までの時期を、古墳に関する事項を中心に扱いたいと思う。対象としている神戸市東灘区は旧武庫郡御影、住吉、魚崎、本山、本庄の五ヶ町村の地域に相当する。

江戸時代に出版された地誌類によると、この地域に数基の古墳があることを記している(1)。当然考古学的見地による記述ではないので内容も不十分だが、伊賀塚古墳など早くに消滅した古墳の存在をうかがい知ることが出来る(2)。

東灘区内の古墳の中で御影塚町2丁目にある処女塚古墳とその東西に位置する求女塚古墳は、菟原処女と二人の壮士による妻問いの伝説などによって古くから有名であった。一八九七年奥村探古はこの三つの古墳を前方後円墳として位置付け、その当時の現状や出土遺物の情况等を報告した(3)。さらに吉井良秀はこの三古墳を伝説の主人公の墓ではなく、この地に存在したと考えられる古代の豪族、凡河内氏の墓に比定する考えを発表している(4)。

処女塚古墳の東、住吉宮町一丁目の求女塚古墳は一八七〇年(一説には一八七七年)墳丘の土取り作業をしていた際に銅鏡や碧玉製車輪石が出土した。一九〇〇年頃にも銅鏡二面が発見されたが、一九〇四年には阪神電車の線路工事によって前方部が破壊されてしまった。この時の様子は現場に立ち会った福原潜次郎によって記録されている(5)。ちなみに出土した鏡や車輪石などは、一九一二年住吉町役場から東京帝室博物館(現東京国立博物館)へ寄贈されて現在に至る。

岡本町一丁目にあった前方後円墳、へぼ塚古墳も明治初年頃から周囲の開発等で墳丘が削平を受けていた(6)。一八九五年、当時の地主の手で墳丘保護のための石垣を構築中に、工事にあたった石工らが銅鏡六面、碧玉製石剣、管玉、勾玉などを盗掘した。後にこれを知った地主は売りに出された一部の遺物を買戻し東京帝室博物館に寄贈した。

この地域一帯に存在するこれらの古墳に注目させる二人の高名な学者がいた。喜田貞吉と梅原末治である。文献史学のみならず建築史や考古学など多方面に足跡を残した学者喜田貞吉は、古代の西摂地方を概説した論文で旧武庫郡の古墳に触れていた。ただ江戸時代以前の諸記録の検討を中心としたため考古学的見地にやや欠けるきらいがある。もう一人の梅原末治は考古学者の立場から近畿地方にある古墳の研究を進めていたが旧武庫郡の古墳にも強い関心を寄せていた(8)(9)。梅原は一八九五年兵庫県の委託をうけて県下の古墳を出土遺物の観察も交えて詳細に検討した(10)。梅原の研究は、この地域の古墳研究に大きな画期をもたらした業績として位

置付けられる。

岡本の山手、岡本梅林のあった山添いの一帯(岡本六丁目付近)には多くの群集墳が存在したようだが、明治初年頃よりこの地域が住宅地として開発されるに至り多くの古墳が消滅した。その工事中に見えられた石棺、埴輪片や須恵器そして周辺に弥生土器が散布していることなどが報告されているが、今ではその面影すらうかがうことは出来ない(11)(12)。(つづく)

〈註〉

(1) 今回参照した地誌類は次の通り。

a、岡田後志「摂陽群談」 一七〇一年

b、並河誠所「摂津志」 一七三四年

c、秋里離島「摂津名所図会」 一七九六年

(2) 伊賀塚古墳・東灘区御影町西平野伊賀塚にあったとされる古墳。摂津志にその名が見える。「神戸地方古墳地名表」(神戸地方古墳調査保存準備の会他編、一九五六年)によると六基の方墳と記載されている。

(3) 奥村探古「摂津国武庫郡おとめ塚」『考古学雑誌』一一六 考古学会 一八九七年

(4) 吉井良秀「摂津国武庫郡灘の処女塚」『考古学雑誌』三一九 考古学会 一九一三年

(5) 福原潜次郎「摂津御田村の東乙女塚」『考古界』三一九 考古学会 一九〇四年

(6) 吉井良秀「岡本村扁保曾塚考」『考古学雑誌』一〇一七 考古学会 一九二〇年

(7) 喜田貞吉「上代の武庫地方」『摂津郷土史論』日本歴史地理学会 一九一八年(後に「神戸市史」

別録一に再録)

(8) 梅原末治「近畿の遺物と遺蹟(3)」『歴史地理』二六一一 日本歴史地理学会 一九一五年

(9) 梅原末治「摂津武庫郡に於ける二、三の古式墳墓(1)」『考古学雑誌』一二一一二 考古学会 一九二二年

(10) 梅原末治「県下に於ける古式古墳の分布」『兵

庫県史跡名勝天然記念物調査報告書』一 兵庫県 一九二五年

(11) 吉井良秀「摂津国武庫郡岡本村野小石棺に就いて」『考古学雑誌』三一一一 考古学会 一九一三年

(12) 松下胤信「兵庫岡本梅林遺跡に就いて」『史

新聞にみる 史料館

去る四月三十日から五月二十九日まで行なわれた特別展「近代の着物に見る生活史」は好評のうちに無事終了しました。ご協力いただいた関係者各位に感謝申し上げます。

1988. 8. 4 神戸新聞より

地域を身近に異色の「三三博物館」

神戸市東灘区に、市民の手で建てられ、運営されている三三(さんさん)な。地域の歴史を身近に感じることが出来る。また、地域の歴史を身近に感じることが出来る。また、地域の歴史を身近に感じることが出来る。

神戸深江生活文化史料館



特別展なども開催、地域文化の拠点として観光を呼び寄せている—神戸深江生活文化史料館で(今年4月30日)

20代の社会人中心に運営 「生涯学習」を実践

「生涯学習」が盛んに行われるようになった。その一つが、地域の歴史を身近に感じることが出来る。また、地域の歴史を身近に感じることが出来る。また、地域の歴史を身近に感じることが出来る。

近世の宿駅争論からみる 舟坂間道

史料館主任研究員 望月 浩

一年に一回、十月十日に史料館友の会主催の行事として、「魚屋道を歩く会」が行なわれる。この道が近世に「湯山間道」と呼ばれ、生瀬・小浜などの宿駅と論争をくり返してきたことは、田辺眞人氏が「魚屋道の往来―近世東六甲の山越え交通史―」（『歴史と神戸』No. 一〇八、昭和五十六年十月一日刊、に所収。後に昭和五十七年十月十日、深江財産区管理会より抜刷、復刊される。）で詳しく論述されている。

筆者も昨年十月十日発行の『生活文化史―史料館だより第10号―』で、前述の「魚屋道の往来」を踏襲し、「本庄村史資料編第二巻」に収録している荷着場開発についての史料を用いながら、近世における魚屋道をめぐる人々の様子を小文にしてみた。

だが、六甲山を南北に横断する抜け荷の道―六甲山間道―は魚屋道だけではなく、他にも諸物資を通行していた道がいく筋かあった。本文では舟坂間道と呼ばれる道について書き進めていきたいと思う。

徳川氏が江戸に幕府を開き、全国を支配するようになるに交通制度の確立が政治・軍事上の支配貫徹のためにも必要不可欠となった。

幕府は江戸を中心とした五街道の整備に着手し、元禄時代の頃には本格的な近世宿駅制度を確立していったとされる。正徳元年（一七一）には、定め

られた宿駅での荷物の継ぎ立てが義務づけられるようになった。よって定められた宿駅を通らない荷物の通行は違法とされた。このため諸物資の往来が活発になってくる慶安年間頃からは、この継ぎ立て権利をめぐって争論が目立つようになってくる。

本文でとりあげる舟坂間道も、生瀬等の宿駅からしばしば指摘され、抜け荷の道であると訴えられてきた道であるが、この道はいく筋かある六甲山間道の中でもっとも東寄りを通っていた道である。有馬から船坂（西宮市山口町）を通り、船坂峠を越えて鷲林寺を経て西宮の飯岩神社へ通じていた。

文政元年（一八一八）に舟坂村が道筋七、八丁にわたって道幅を二間に切り広げた。これに対し生瀬が訴訟をおこした。訴訟の内容は次のとおりで、

「私駅之儀は丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆、其外播州辺通り来候道筋二御坐候、然処右往来之旅人駕歩行荷等并荷物牛馬等にて御用之手透ニ相勤是迄駅所相続仕来候処、此度舟坂村ニ新規ニ西ノ宮へ山ヲ崩し、往来ヲ拵、右処々之荷物・旅人等ヲ引請、西ノ宮へ通行いたさせ度存念に御坐候」

訴訟の結果、和談が成立したが、
①当村山道造立候儀此度西宮領境迄造り候故旅人通行仕候已後山道造り度候節ハ領境迄は造り立不申

境目より志丁^{斗前}□□ニて造り止メ申候約定ニ御座候
尤本文ニ生瀬より差障不申と有之候得共道造り之
節立会之上道造り可申候為添証依て如件」

すなわち、舟坂村領分と西宮町領分との境界点と他一ヶ所に木戸を設け、村人だけの通路として、その他の往来を停止する。領分境の地点より一町手前で道作りをすることなどが条件となった。

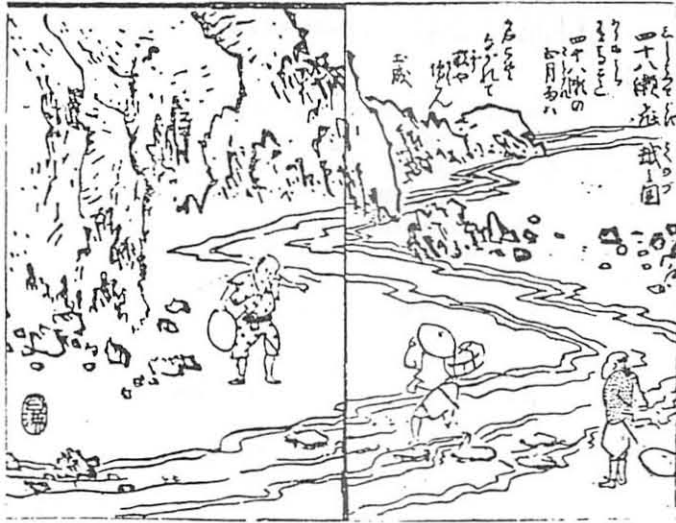
しかし、この訴訟が出されている間も、武庫郡上ケ原新田の百姓が牛をひいて間道を通過したり、播州神東郡牛尾村の百姓が大坂へ出るために通過したことがあった。このことから遠方の者も利用していたようである。だが、舟坂村と西宮本町の平松屋喜兵衛が結んで、人や荷物を通していたことが露顕した。

その後、先の和談が成立した三年後の文政四年（一八二二）に舟坂村が間道を普請し、この道は大道だと近隣の在郷に伝え広めたりした。そのためにもまたもや生瀬の宿駅より訴訟が出された。

また、天保十年（一八三九）には、舟坂村が先の約定（文政元年）を破り、字清水谷より約二〇町の距離を二間幅の道路に切り広げた。このことがまた争論をひきおこしたようである。

文政元年の約定の後も、たびたび間道普請を行なったので、生瀬の宿駅も神経をとがらせてきたようである。その例が次にあげる万延元年の事件である。
万延元年（一八六〇）八月二六日付の生瀬駅役人から下山口村（西宮市山口町）にあてた「船坂村間道荷物運送一件引合書」で、

「此度其御村佐兵衛儀駅々格別之及差支候舟坂村よ



大多田川四十八瀬 (滑稽有馬紀行より)

り六甲山打越之閑道之荷物致運送候此義其儘ニ差置候ハ、駅々御用継立之相妨ケと相成候」
と訴え、下山口村御役人に、佐兵衛がなぜ閑道通行をしたのか、取調べをしてほしいと頼んでいる。
この訴訟に対して佐兵衛は次のような詫証文を提出している。

「私娘越木岩村へ縁付為致候ニ付、当五月三日吉日ニて右荷物船坂村迄罷出候処右同村ニて聞及候処此比雨降続候て川越難出来候様申居候ニ付何心なく山越ニ閑道打越へ候事ニ御座候……」
と嫁入り道具を運んだと釈明し、また、舟坂から生

瀬への有馬道が雨のため交通困難であったと言っている。確かに生瀬―舟坂間の四キロほどの道は、大多田川の河原や渓谷を通るので、非常に難渋をきわめた。前述の青野道を通過する理由に、

「然共生瀬村より船坂村迄壹里余之所川之瀬伝往来仕候、大雨之折節ハ不及申、一時之洪水にも通留り申候……」
としてある。

生瀬から有馬へ至る道筋の前半を大多田川四十八瀬といっているが、『滑稽有馬紀行』に、

「水ますときはとびこへこの上を水ながれ行く、其水の中をとひ越かよふなり、全体大石多く小石もまじる甚だのなん所なり、往来の道筋たしかならず、おりくの大水にてながれる故、その度に道かはるかなり、此ゆへに往来のもの、人のかよふ足のあとをしるへにして往来するゆへ、いたってわかりがたし、かるがゆへにあんないなくてはしれず云々」
とあるから、実際生瀬へは交通困難であったのだろう。

六

六甲山間道に物資輸送の影響をもつとも受けたのは、生瀬であろう。西宮・兵庫へ行く荷物が主だったからである。特にこの舟坂間道は、青野道によって京・伊丹へ向かう荷物が頼りだっただけに、神経をとがらせていた。

また、この舟坂間道は、魚屋道と違い、在郷が特権的宿駅と対抗していたと言えるであろう。

しかしながら筆者は、結局西宮へ行く荷物であるし、西宮の平松屋喜兵衛がからんでいるところを見

ると、西宮駅が兵庫・湯山のように黙認をしていたのではないかと考えられる。確固たる史料がないのはつきりとは言えないが。

また、下山口村佐兵衛の場合のように、生瀬―舟坂間の交通事情の悪い時のパイパス代わりであったのだろう。

〈註〉

① 『西宮市史』第五卷八二七頁「船坂村新規道造りにつき故障申立て」

② 『山口村誌』三九三頁「為取替一札ニ添証文之事」

③ 『西宮市史』第二卷六三〇頁

④ 『生瀬の歴史』九〇頁

⑤ 『西宮市史』第二卷六三〇頁

⑥ 『西宮市史』第五卷八二八頁

⑦ 同右「嫁入荷物間道輸送詫証文」

⑧ 『西宮市史』第五卷七九四頁「生瀬村馬借絵図面断帳」

(主な参考文献)

『西宮市史』第二卷／魚澄惣五郎／西宮市役所

『西宮市史』第五卷／武藤誠・有坂隆道／西宮市役所

『魚屋道の往来』／田辺真人／深江財産区管理会

『山口村誌』／山口村誌編纂委員会／西宮市役所

『近世の宿駅争論』『近代』第七号／八木哲浩

『滑稽有馬紀行』／大根土成／文暉堂

『生瀬の歴史』／松岡孝彰

『街道と水運』岩波講座日本歴史10近世2／渡辺信夫／岩波書店

